埼玉純真短期大学研究論文集　第８号　PP.81-83

サラスワティ外国語大学（STIBA SARASWATI）での交流

金　子　恵美子
（こども学科　専任講師）

2015年3月10日(火)～16日(月)の海外研修では，学校法人カシ・サヤンの幼稚園・小学校，そしてサラスワティ外国語大学を訪問し，見学及び交流授業を行った。インドネシアのバリ島での保育や教育の様子を知り，日本との共通点や違いについて考えることで，日本の教育問題や今後の学生への教育について改めて考える機会となり，とても有意義な時間となった。

ここでは，サラスワティ外国語大学の見学及び交流授業の様子についてまとめる。サラスワティ外国語大学には，3月13日(金)9時30分～11時30分に打合せ及び見学，18時30分～21時30分に交流授業のため訪問した。

サラスワティ外国語大学は，インドネシアのバリ州デンパサールにある私立大学で，1994年に創立され，日本語学科と英語学科が設けられた大学である。サラスワティ外国語大学は外国語教育を専門とする大学であるが，その系列校であるサラスワティ大学にはその他の多様な専門学部も設けられているとのことである。サラスワティ大学は，1945年8月17日のインドネシア独立後，1946年に創立された大学である。大学の創立者が日本に高い関心を持っていたことから，すべての学部に日本語科目の授業が設けられているとのことであった。大学名に冠している「サラスワティ」という名は，ヒンドゥー教の唯一神サンヒャン・ウィディ・ワソの化身として現れる神々のうちの一人，学問の女神の名に由来している。インドネシアで最も信仰されているのはイスラム教であるが，バリ島の人々の多くはヒンドゥー教を信仰しており，町の至るところ，さまざまな施設や家々の敷地内で，ヒンドゥー教の寺院やお供えを見ることができる。カシ・サヤン幼稚園・小学校を運営する財団法人バリカシワマタの代表である柏俣秀夫氏にバリについてうかがった際に，日本で問題となっている教育問題や心理的な問題などはバリではあまり見られず，そこには宗教の存在（信仰心の強さ）が大きな影響を与えているのではないかとのお話があった。大学名にヒンドゥー教の学問の神の名を冠していることも，こうしたバリ島の人々の信仰心の強さとの関連が感じられた。

サラスワティ外国語大学の学生数は約1,000名であり，日本語学科では約300名が学んでいる。大学の授業は夜間に行われており，18時30分から始まり，21時30分まで行われている。学生の多くは日中は仕事をしているとのことで，そうした点も日本の大学，大学生とは状況が異なっている点である。

打合せ及び見学では，サラスワティ外国語大学の代表であるKOMANG SULATRA先生，日本語学科の教員であるメイダ先生と打合せをさせていただき，大学の歴史や様子などについて教えていただいた。その後，交流授業の内容について検討したあと，大学附属の幼稚園の様子，大学の授業が行われていない日中に大学の校舎を使用しているという小学校の様子，大学構内の施設・設備につ

いて見学させていただいた。

大学附属の幼稚園が大学と同じ敷地内に設置されているところは，附属幼稚園や小中学校を大学の敷地内に設置することも多い日本の大学とも共通する点であるが，小学校については大学の建物を使用し，その棟ごとに経営者の異なる小学校が並んで設置されており，日本では考えられない構造となっていた。

次に，大学構内の施設や設備であるが，大学構内を見渡して驚いたのはバイクの数である。街中の道路でもバイクを多く見かけるが，大学構内にもびっしりとバイクが停められており，バイクで通学している学生がほとんどのようである。学内の施設については，学生のための事務の窓口などが設けられているのは日本と同じであるが，日本の学生食堂のような大きな食堂はなく，食べ物や飲み物を販売している売店と小さめな食堂（日本のように定食などが販売されているわけではなく，簡単な食品等を購入して食べている様子）が見られた。食事に関しては，交流授業で本学の１日の流れを紹介する中で昼食時に学生がお弁当を持参することもあることを紹介したが，バリ島ではほとんどの学生が昼食にお弁当を持参する習慣はないとのことであった。研修旅行で案内をしてくださっていたカシ・サヤン幼稚園・小学校のマネージャーであるKETUT TRESNA（トレスナ）氏にもうかがったが，バリ島の人々は昼食は自宅に戻って取ることが多いとのことで，そうした点も日本とは事情が異なるところであった。また，日本語学科の図書館も見学させていただいたが，日本の絵本や小説，教科書などが並べられていた。その中には日本語学科の卒業生の卒業論文も所蔵されていたが，日本に関するテーマについて執筆されており，大変興味深いものであった。卒業論文の中には，“ドラえもん”の漫画や登場人物について考察しているものもあり，また大学での交流授業の中でも知っている日本のアニメとして，“ドラえもん”や“名探偵コナン”などの名があげられるなど，日本の漫画に対する関心の高さがうかがわれた。また，文化祭では日本語劇などだけではなく，盆踊りやコスプレ・コンテスト，浴衣コンテストなども行われているようで，日本語や日本の文化に対して，積極的に学んでいる様子がうかがえた。大学構内を歩いていると，日本語で声をかけてくれる学生も多く，また撮影させてもらうことをお願いすると快く撮影させてくれる学生や小中学生の姿があり，他者とのコミュニケーションに積極的であり，また日本に対してとても好意的である印象を受けた。

打合せ及び見学終了後は一旦大学を辞し，授業が開講される18時30分～21時30分に交流授業を行うため改めて大学を訪問した。今回の交流授業では，大学で日本語を学び始めて約６ヶ月になる１年生３クラスと，すでに日本語を学んで２年以上になる３年生２クラスを対象に行った。各クラスに約30名の学生がおり，１年生には日本の四季についての紹介と折り紙の授業を行い，３年生には本学の学生生活の様子を紹介しながら日本の学生生活や若者について紹介する内容で授業を行った。１年生はまだ日本語を本格的に学び始めて日が浅いこともあり，コミュニケーションがスムーズには取りにくい場面もあったようであるが，３年生になると，学生たちの日本語の力はかなり高く，ひらがな，カタカナ，漢字といずれも苦労なく読むことができ，日本語での説明もスムーズに理解できている様子であった。また，授業前後の挨拶も日本式の「起立，礼」で行ってくれるなど，日本についても様々なことを知っている様子であった。

本学の様子や学生生活の紹介については，中庭などの様子には「きれい！」と感嘆の声が上がり，授業についてもピアノや

音楽の授業に興味をひかれている様子であった。音楽ができることは，バリ島の学生たちにとって非常に魅力があることである様子がうかがえた。バリ島では伝統的な楽器であるガムランなどを見かけることが多く，カシ・サヤン幼稚園・小学校でも子どもたちは伝統的なダンスを習っており，音楽や芸術への関心の高さ，伝統的な文化を大切にしている様子が感じられた。また，本学の学生が学ぶ手遊び歌（子どもたちが次の活動に向かう準備を整えるために最後は「手はお膝」で終わる歌）を本学の小澤和恵先生，加藤房江先生から教えていただいたが，その歌の意味やどういった場面で使うのかについての説明もしっかり理解し，納得する声が上がっていた。また，最後の質問の時間には，本学で取れる資格や日本の大学で外国人学生が保育者に関する資格を取得した場合に日本で働くことができるのかなど，とても積極的な質問も見られた。また，最後に日本を訪れた際には本学の見学や授業参加などが可能なことを伝えるととても関心を持った様子で，本学のシャツや鉛筆，日本らしい風景写真のカレンダー，うちわなどのプレゼントにもとても喜んでくれている様子であった。

クラスで授業をされていた先生方や大学の職員の方々も大変温かく迎えてくれ，バリの人々の温かさを感じられた大学への訪問であった。交流授業の間，学生たちはとても熱心に，そして積極的に参加してくれており，学生たちの学ぶ意欲の高さを感じた。こうした姿勢は，学生たちが仕事をすでに持ちながら学んでいることや，発展している社会状況の中で大学での学びが現在の仕事や将来につながっていくという目的意識を持ちやすいことなどとも関連しているものと思われ，日本での教育活動においても目的意識を育て学びの意欲につなげていくこと，また他者とのコミュニケーションへの積極性を育てるように働きかけていくことが大切なのではないかと考えさせられた。